

綾北平野の巨石墳

徳島文理大学 大久保徹也

はじめに

古代阿野郡（綾郡）の北半部を占める綾北平野はさほど広大なわけではない。河口附近の平地が綾川の旺盛な沖積作用によって徐々に形成されてきたことを踏まえれば、古墳時代から讃岐国府が営まれた古代までの間、綾川河口に近い高屋、神谷、八十場付近までは海が入り込む沖積未了の三角州地帯がひろがり、西庄町別宮と加茂町北山を結ぶ2 km強のラインを底辺に、ここから府中町新宮までの3.2 kmほどを奥行とする、狭い三角形を呈する範囲が主たる土地利用の舞台であったとみられる。

綾北平野の奥部に讃岐国府が営まれ、それに先駆けて平野を見下ろす西方山塊には屈指の規模の古代山城「城山城」が築かれた。南端を官道（南海道）が通り綾川の渡河点近くに驛（甲知駅）が置かれる。至近の位置に鴨麿寺、開法寺、醍醐麿寺の3ヶ寺が相次いで建立される。また綾坂を挟んだ東隣の国分

寺盆地北辺に讃岐国分寺・国分尼寺を置く。このように古代律令国家は綾北平野を讃岐統治の拠点として選んだ。単に地理的な要因だけから説明することは難しい。この背景には何があったのだろうか。綾北平野の拠点化は7世紀第3四半期（飛鳥時代後半）の城山城造営に始まるわけであるが、これに先立つ古墳時代末から飛鳥時代前半期の様相を、巨石墳（大形横穴式石室墳）の築造動向を手がかりに探って見たいと思う。

話は少々迂遠となるが、まずは古墳時代、なかんずく横穴式石室墳の築造が盛行する古墳時代後期について再確認し、次いで讃岐地域の横穴式石室墳の築造動向を概観した上で、綾北平野の特質に迫りたいと思う。

1. 横穴式石室とその時代

3世紀半ばから6世紀末までのおよそ350年間、前方後円墳という特徴的で巨大な墳墓が盛んに築かれた期間を古墳時代と呼び、これに先立つ弥生時代と、その後に続く飛鳥時代の間に一つの時代を設定している。少しややこしいことになるが、前方後円墳が築かれなくなった以後、つまり7世紀に入っても半世紀以上の間は目につく大形墳墓の築造は続く。例えば有名な奈良県石舞台古墳-蘇我馬子墓との伝承がある。-もその一つだ。しかし前方後円墳と交代するように6世紀末には飛鳥寺を嚆矢に壮麗な仏教寺院の建立が始まり、一段階遅れて中央政府機関の充実を示唆する大王宮の整備も始まるらしい。これは、こうした点を重視して、なおしばらくの間大型の墳丘墓は存続するものの前方後円墳の廃絶を以って時代の区切りとする意見が強い。古墳時代の350年の間に日本列島の主要部分をカバーする政治的なまとまりが確立する。同時代の中国史書はこのまとまりを「倭国」と表現し、その盟主を倭国「王」とみなした。これを前提に、続く飛鳥時代の中に試行錯誤を重ねつつ、7世紀末には精緻な地方統治制度を備えた強力な中央集権的な国家制度（律

令制国家）が立ち上がる。

横穴式石室は古墳埋葬施設の一形式で、祖形は朝鮮半島に求められる。古墳時代中期初頭（4世紀末）に九州島北岸地帯の一部に導入された。一つの墓室（玄室）に2体以上の遺骸を順次時間収めてゆく（追葬）ため、あらかじめ墓室の一方に出入口を設ける構造だ。当初はほとんど墓室壁面の一方に口を開けておくだけの作りだが、次第にその前面にトンネル状の通路を取りつけるようになる。

古墳時代後期初めまでは、横穴式石室はほとんど九州中・北部地域に限られるローカルな埋葬施設形式であった。岡山県千足古墳（巨大前方後円墳 造山古墳の陪塚とされる。）と、香川県高屋丸山古墳で古墳時代中期半ば（5世紀中葉）に遡る横穴式石室墳が知られる。ともに西部九州、有明海沿岸に多い横穴式石室の形態的特徴が見出されるが特異な例外的な存在で、そのまま横穴式石室が定着することはなかった。

九州島以外に横穴式石室が普及・定着を始めるのは早くても古墳時代後期初め（5世紀末）に遅れる。讃岐地域ではやや遅れて、綾川河口部に近い坂出市

雄山古墳群が最も古い横穴式石室の採用例だ。これは後期前半、6世紀第1四半期の所産とみられる。その後も6世紀第2四半期頃までは旧来の竪穴式石槨系統の埋葬施設も存続し、横穴式石室が古墳の主たる埋葬施設の地位を確立するのは6世紀末後半、ほとんど前方後円墳が終焉を迎えつつある時期にずれ込む。その後、飛鳥時代の半ば（7世紀半ば）頃までは盛んに横穴式石室を納めた古墳（墳丘墓）が

築かれ続ける。したがって横穴式石室の盛期は6世紀後半から7世紀半ば過ぎまでの長くても一世紀間弱ということになる。

ただしちょうど古墳時代から飛鳥時代の転換期であり、日本書紀などの古記録からも片鱗が窺われる列島の政治体制や社会情勢が変容する時期の代表的なモニュメントであるから、横穴式石室墳の築造動向には大いに注目しておく必要がある。

2. 讃岐における横穴式石室の導入と定着

讃岐地域の横穴式石室の形態はそれなりに多様だ。初期には系統の異なる様々な石室形態が持ち込まれた。先に触れた雄山古墳群の横穴式石室は近畿地方のそれをモデルにした形態とみられる。しかしやや遅れて丸亀平野周辺には異なる石室形態が持ち込まれ、三豊地域の一部にはこれらとはまた違った伊予東部地域との関係が読み取れそうな横穴式石室が登場する。その後も外からの影響とそれを独自に発展させた結果、様々に個性的な石室が生み出され、時期的な変化も著しい。こうした点に6世紀半ばから後半の活発な地域間交流の実態を読み取るができるだろう。

ところで導入初期の横穴式石室は意外に小さい。せいぜい二つの木棺を並べおき、埋葬儀礼で用いた食器類など様々な器物-いわゆる副葬品-をその余白にまとめ置く程度のサイズだ。玄室床面積はせいぜい4～5㎡程度が一般的だ。6世紀半ばの前方後円墳である善通寺王墓山古墳（墳長50m前後）や菊塚古墳（墳長推定60m）でも各々7.5㎡、8.6㎡だ。平均的サイズよりもかなり大きいのが、これは玄室内に棺を安置する特別な施設-石屋形-を作り付けたため、墳丘規模や古墳の格式に応じた石室サイズの較差はあまり目立ったものではない。この時期の横穴式石室では人頭大かそれよりやや大きい程度のかなり小振りの塊石を積み上げて壁面を築く。また玄室に取り付く通路（羨道）は短くて狭く低い。かろうじて棺を搬入できる程だ。

6世紀第4四半期に横穴式石室の急速な大形化が始まる。観音寺市母神山鐘子塚古墳は最初期の大形横穴式石室を納める。玄室の最大幅2.5m、長さ5.2mを測り高さは3mに近い。玄室の床面積はほとんど12㎡に達する。使用石材も大形化し、最大の壁面構成材は幅2.2m高さ1mを測る。鐘子塚古墳の直後には玄室床面積24㎡を超える観音寺市椀貸塚古墳（大野原古墳群 / 図1）が続く。四国島最大の横穴式石室だ。使用石材のサイズは大きく及ばない

が、床面積の点では代表的な「巨石墳」として著名な奈良県石舞台古墳や岡山県こうもり塚古墳に準じた規模である。以後、玄室面積の点では椀貸塚古墳には及ばないが、幅／高さが2mを越えるような巨石を組み上げた玄室床面積10～15㎡に達する大形横穴式石室墳（巨石墳）の築造が7世紀半ばまで続く。大野原古墳群では椀貸塚古墳を含め傑出した3基の巨石墳が7世紀半ばまで順次築かれ、各々の時期では最大規模石室を収めている。7世紀前半の平塚古墳（18.3㎡）を経て、7世紀半ばの築造と推測される角塚古墳（11.4㎡）では最大幅2.6m長さ4.6mを測る玄室の奥壁と左側壁をそれぞれほぼ一石で構成するような巨石を用いている。ちなみに母神山鐘子塚古墳と椀貸塚古墳では玄室の前面にこれをコンパクトにした区画を設けその先に羨道が取り付く特徴的な石室形態がみられる。複室構造と呼ぶもので北部九州に祖形が求められるが、鐘子塚古墳や椀貸塚古墳の石室はこれを改変したものと見られる。次第に形を変えながらもその名残は平塚古墳、角塚古墳に色濃く見出されると共に、椀貸塚古墳以降の讃岐地域の巨石墳ではこの特徴を引き継ぐものが多い。伊予東部や阿波、土佐の巨石墳の一部にも及んでいる。

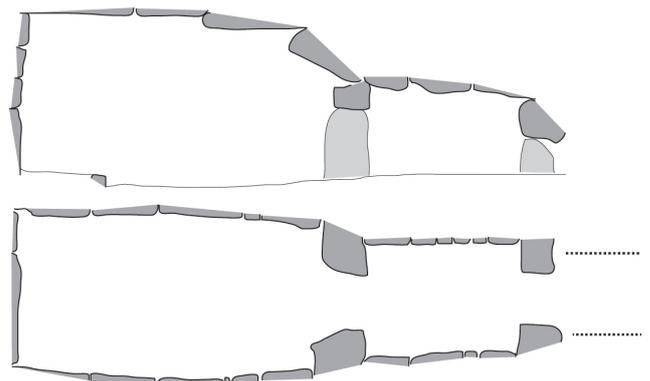


図1 椀貸塚古墳の石室形態

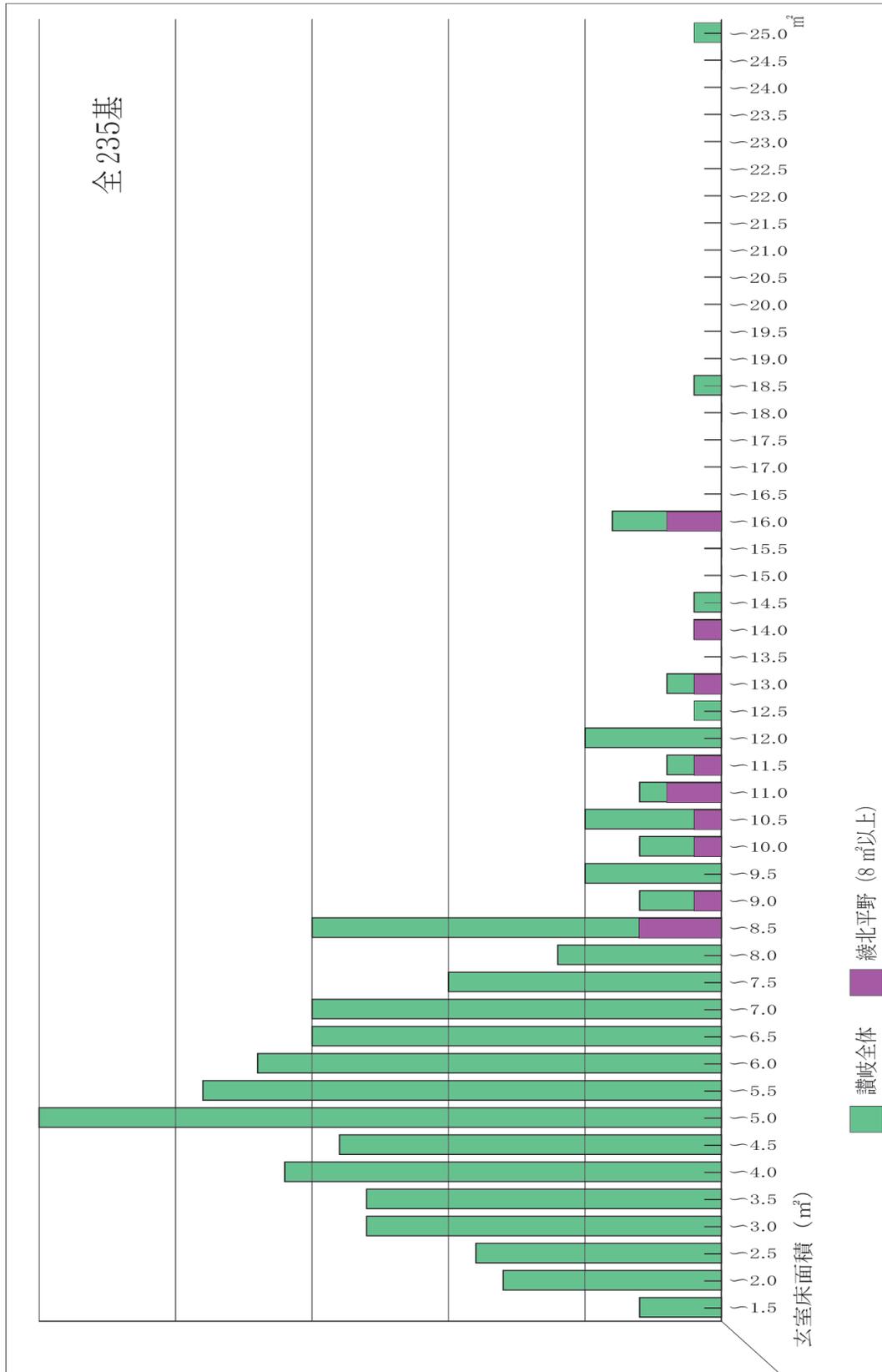


図2 讃岐石室床面積分布グラフ

3. 巨石墳の築造動向

讃岐地域全体では少なくとも2000基を超える横穴式石室墳が築かれたとみている。しかし多くは埋もれあるいは失われている。現在石室の規模や形が判明している235基の石室規模(面積)をグラフで示した(図2)。例外的に1㎡大の極小石室が若干存在し、その対極には先に挙げた椀貸塚古墳(24.6

㎡)などの巨大石室が位置する。一口に横穴式石室といっても規模の差は甚だしい。その中で石室床面積5㎡前後の石室が最も多く、8㎡未満の横穴式石室が全体の77%を超える。床面積5㎡ではおよそ石室長3.5m幅1.2mほどとなる。8㎡では長さ4m幅2mほどだ。10㎡超級の石室は26基と全体の一分強

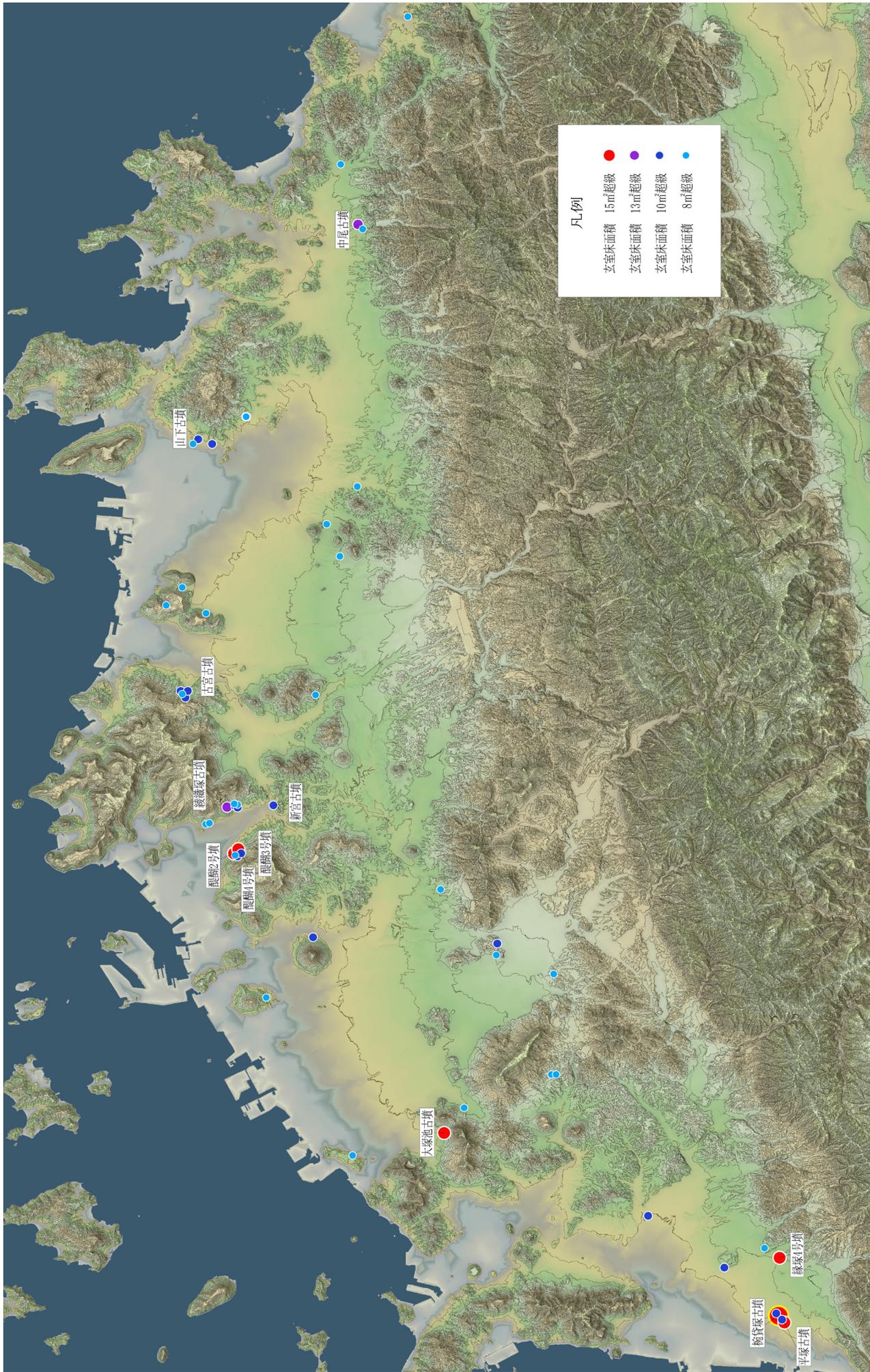


図 3 讃岐大型横穴石室墳の分布

を占めるに過ぎず、玄室床面積 13 m²を超えるクラスになるとわずかに 8 基を数えるだけだ (図 4)。

別の機会に検討したことだが、その時には横穴式石室に葬られる層を多くても当時の讃岐地域の全人口の 2 割弱と推測した。そうすると面積 10 m²超級の大型石室に葬られるのは全体のトップ 2% 内外という見通しが得られる。

大形の横穴式石室墳 (玄室床面積 8 m²以上) の分

布を図 3 に示した。疎密や規模の差が現れて、とくに讃岐東部の希薄さが目立つが、それでもこのクラスの大型石室墳の分布はほぼ全ての中小河川水系に及んでいる。次期律令制国家の地方統治制度ではおおよそ河川水系ごとに「郡」を設置している (ことを考慮すれば、後の郡領相当の有力者をこのクラスの大型石室墳の造営者層と推測できるだろう)。

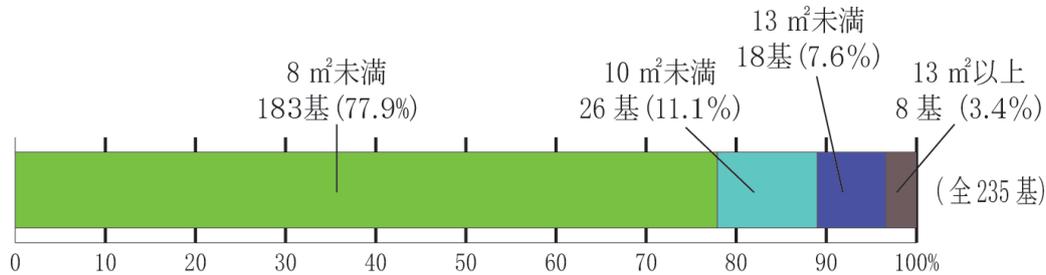


図 4 横穴式石室の規模構成 (玄室床面積)

4. 綾北平野の巨石墳

ただしその一方で巨石墳の分布上の偏りは無視できない。綾北平野の様相が目される。再び図 1 に目を向けてみよう。グラフでは綾北平野の 8 m²超級大型石室墳を別の色で示してみた。数の多さが浮かび上がる。この点をもう少し詳しく見るために各々円グラフで 8 m²超クラス全 52 基、10 m²超クラス全 26 基、13 m²超クラス全 8 基の地域別築造数を示した図 5 を挙げておく。後の阿野郡の北部を占めるだけのさして広くない綾北平野に際だって多数の巨石墳が集中する。8 m²超クラス石室では全 52 基中 13 基、10 m²超クラス石室では全 26 基中 8 基、13 m²超

クラス石室では全 8 基中 3 基に達する。椀貸塚古墳、平塚古墳など、ずばぬけて傑出した巨石墳からなる大野原古墳群が所在する三豊南部地域 (令制刈田 (豊田) 郡) の全域を合わせても築造基数の点では及ばない。高松平野東部以東の諸地域 (ほぼ令制の三木・山田・寒川・大内郡にあたる。) 全体でも 8 m²超級石室では綾北平野 13 基に対して 11 基、10 m²超級石室では 8 基に対して 4 基、13 m²級石室では 3 基に対して 1 基と大きく水をあけられている (図 5)。

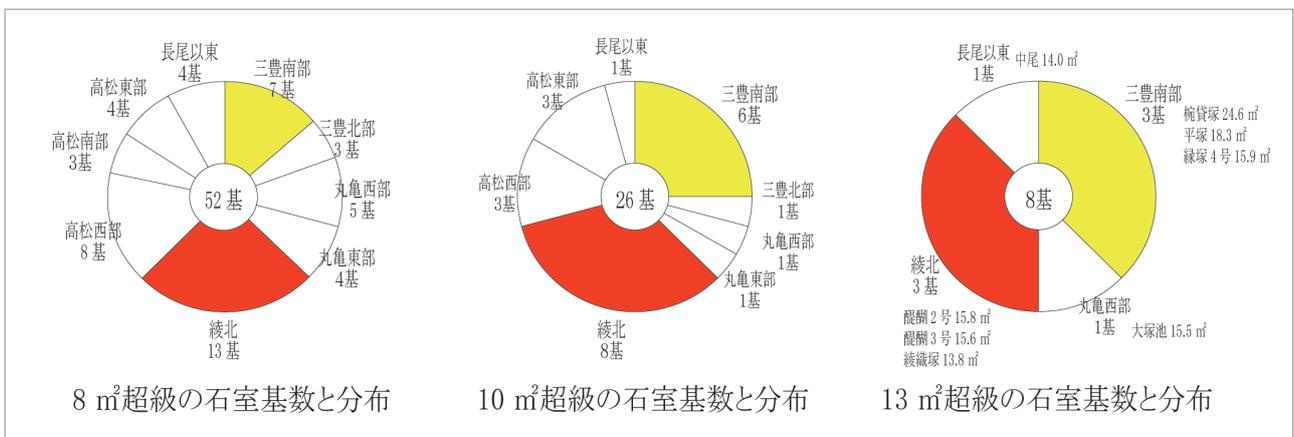


図 5 大形横穴式石室墳の地域別築造数

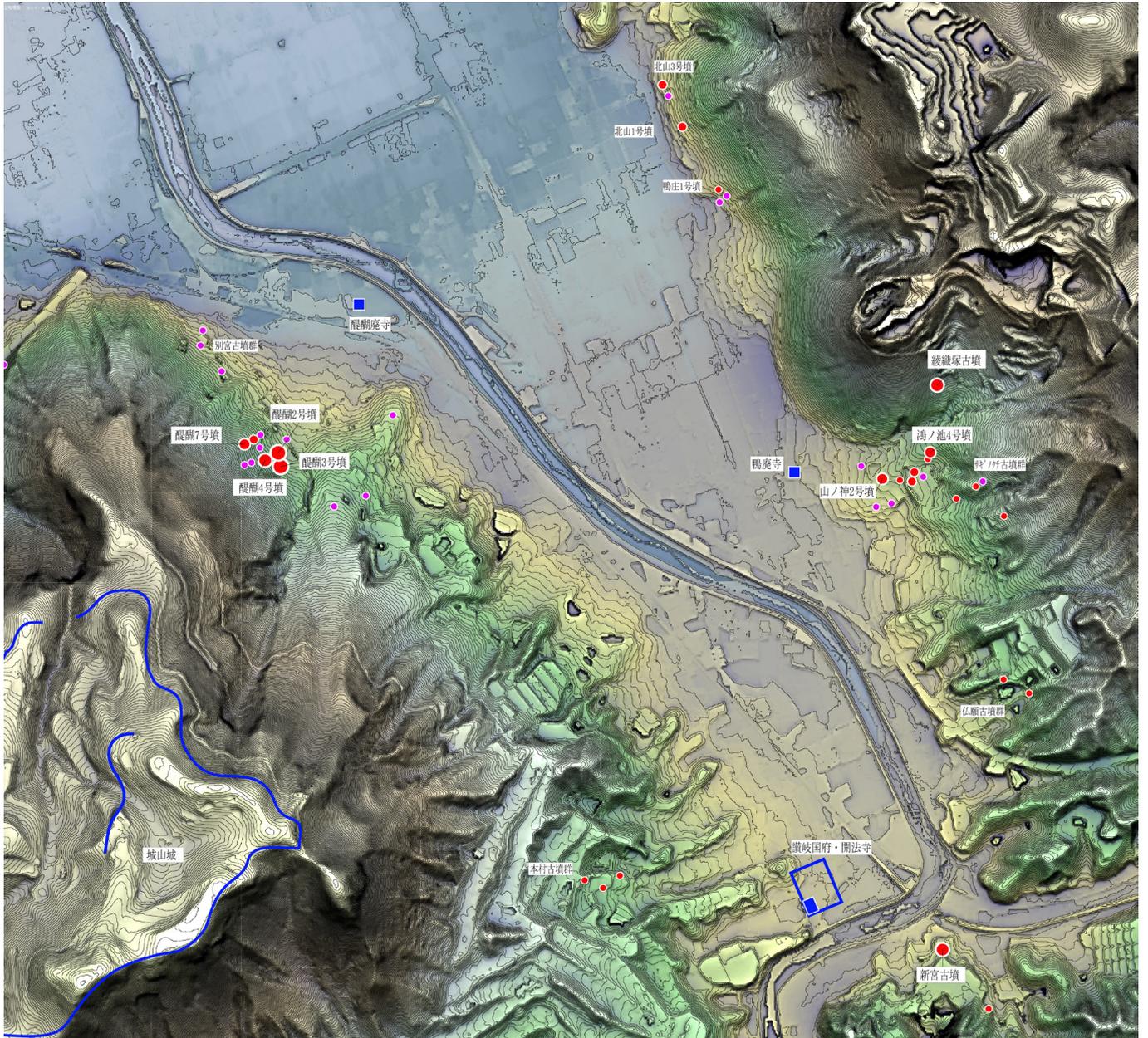


図6 綾北平野の横穴式石室墳分布

続いてこの大型石室墳が集中する綾北平野の後期古墳（横穴式石室墳）全体の分布を見てみよう。全体で45基の存在が知られ、それらは幾つかの地区に分かれて営まれている（図6）。城山北東麓に一つのまとまりがある。城山温泉の所在する尾根筋と北側別宮地区に横穴式石室墳各3基が知られるがいずれも平均的かそれ以下のサイズとみられる。しかし両者の中間の山腹にある醍醐古墳群（少なくとも10基）には綾北平野最大の巨石墳が存在する。醍醐2号墳（15.8㎡）と同3号墳（15.6㎡）だ。三豊南部の平塚古墳（大野原古墳群18.3㎡）に次ぐ規模でこのサイズの巨石墳は他に縁塚4号墳（三豊南部）と大塚池古墳（丸亀平野北部）が知られるだけだ。醍醐4号墳（11㎡）と同7号墳（10.9㎡）も他の多くの地域ではトップクラス巨石墳に相当する規模を持つ。

綾川を挟んだ蓮光寺山南麓の鴻ノ池周辺にも山

ノ神2号墳（推定10.6㎡）、鴻ノ池4号墳（10.4㎡）を筆頭に巨石墳が集中する。玄門部の巨大な石組みだけが鴻ノ池に残る鴻ノ池1号墳も準じた規模が推定できる。北側の烏帽子山中腹にはこれらを見下ろすように単独で大形の綾織塚古墳（13.8㎡）が位置する。なお普通クラスの横穴式石室墳だが特異な線刻画で知られる。サギノクチ1号墳は鴻ノ池の谷筋を挟んだ南方山腹に位置する。

平野南端の丘陵には新宮古墳（12.8㎡）が単独で立地する。この他、五夜嶽西麓の北山古墳群や讃岐国府の背後に位置する本村古墳群にも玄室床面積8㎡前後に達する大形横穴式石室墳が含まれる。

ではこうした巨石墳各々の築造時期はいつか？ また綾北平野の巨石墳全体の築造期間はどの程度だろうか。綾北平野に巨石墳が集中することの意味を探るためにはこの点が大切だ。今のところ綾北平野では6世紀後半に遡るやや古手の横穴式石室

墳は知られていない。北方の雄山山麓には6世紀前半代に初期の横穴式石室を収める雄山古墳群が営まれる。額坂峠を下った城山南麓には6世紀半ばから後半の地獄谷古墳があり、城山北麓の真伏古墳も同様の時期が想定される。周辺にはこの時期の横穴式石室墳が分布するものの綾北平野には及ばない。それどころか少なくとも古墳時代中期の後半段階以降、綾北平野は目立った古墳が確認できない空白エリアであったらしい。

平野南端の新宮古墳が綾北平野最古の横穴式石室墳らしい。相前後して仏願1号墳や鶴ヶ峰西南尾根古墳が築かれるが、大型石室墳の築造は新宮古墳から始まる。そしてこれと歩調を合わせるように中小形の横穴式石室墳も登場する。新宮古墳の石室は椀貸塚古墳の特異な形態（複室構造）を引き継ぎ、その一部を省略したもので、形式的には椀貸塚古墳と平塚古墳の中間に位置づけることができる。かつて羨道前面から出土した須恵器の特徴と合わせて6世紀末ないし7世紀初頭に位置づけられる。綾織塚古墳と醍醐3号墳の石室は新宮古墳の特徴を簡略化させながら引き継ぐもので、この点から新宮古墳に直続する時期が推測される。醍醐2号墳はさらにもう一段階新しいだろう。醍醐4号墳、鴻ノ池1号墳、同4号墳、山ノ神2号墳は石室が破損していて確定しづらいが醍醐3号墳ないし醍醐2号墳に並行する時期におくことができる。玄室と羨道がほとんど一体化するなどさらに新しい様相を持つ醍醐7号墳、同8号墳、鴨庄1号墳、お宮山古墳はもう一段階下った時期の産物であろう。小形石室墳の一部では今少し時期が下る可能性はあるが醍醐7号墳などを以て綾北平野における巨石墳の築造は終焉を迎える。醍醐7号墳など新しい様相の横穴式石室は7世紀半ばの角塚古墳（三豊南部）や大石北谷古墳（旧寒川郡）に共通する部分が多いことから同じく7世紀半ば頃に位置付けることができる。

少し遅れて7世紀第3四半期のうちには古代山城・城山城の造営が始まるが、巨石墳の造営はそれ以前に終息することになる。つまり6世紀末ないし7世紀初頭に新宮古墳の築造を以て始まる綾北平野の巨石

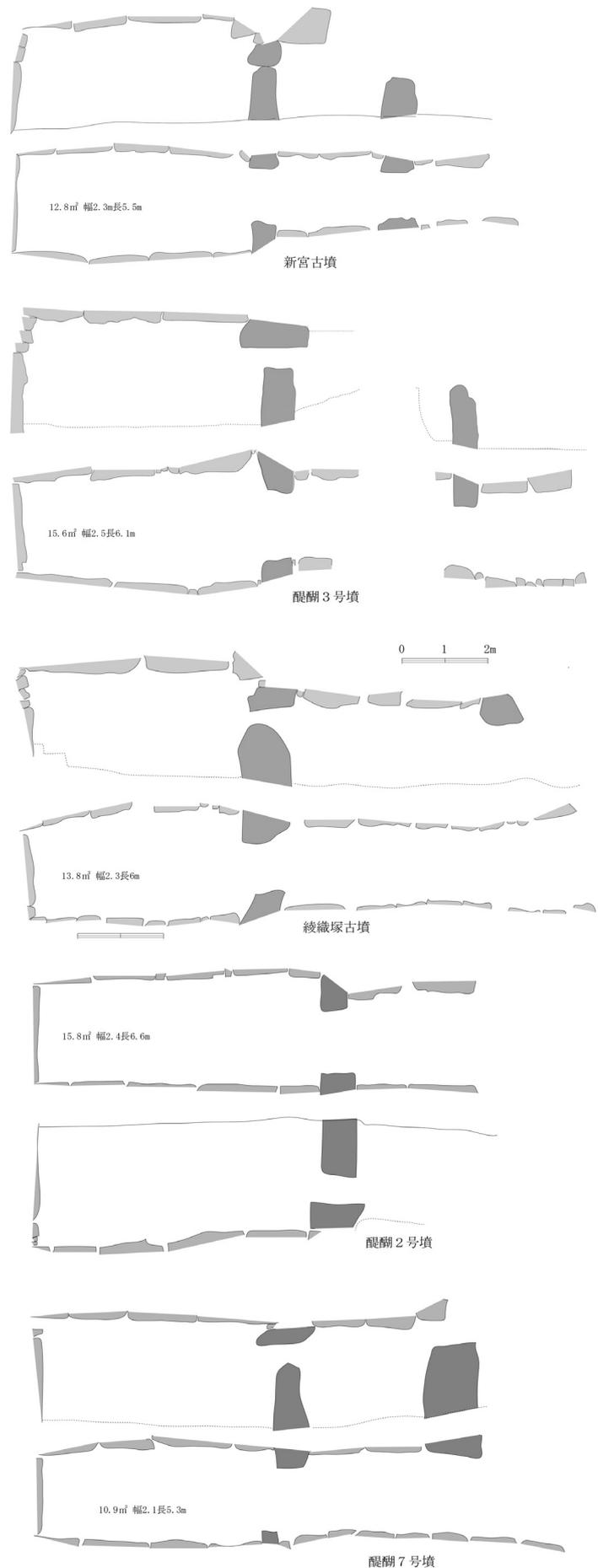


図7 綾北平野の主要な横穴式石室形態と変化

墳築造は綾織塚古墳・醍醐3号墳、醍醐2号墳などの段階を経て7世紀半ばの醍醐8号墳などの築造までの半世紀ほどということになる(図7)。素直に

見ればこの間にせいぜい二世代ないし三世代の間を見積もることが精一杯だ。

5. 綾北平野における特異な巨石墳の集中的築造

想定される巨石墳の築造期間幅は重大だ。綾北平野の巨石墳(玄室8㎡超クラス)13基の背景にこのクラスの墳墓を築きうるような有力グループ複数の存在を想定しなければならなくなる。単純に計算すれば5グループ前後の有力者が綾北平野に並び立つことになる。石室規模からすれば後の郡領相当クラスの有力グループ複数がここに結集しているとみなければならない。綾川流域の平地を見下ろす山腹の各所に巨石墳が分かれて築かれている事実はこの推測に合致しそうだ。それでも醍醐古墳群や山ノ神・鴻ノ池の古墳群に属する巨石墳は多過ぎるかもしれない。これら自体が複数グループの有力者の共同墓所的な性格を持つ可能性も否定できない。

巨石墳が集中する意味を考える上で参考になるの

.....

こうした周辺の状況を踏まえ最後に次のような仮説を提出しておきたい。古墳時代末ないし飛鳥時代初頭に、綾川流域や周辺の有力グループが結束して綾北平野に進出し、この地域の拠点化を進める動きがあった、と。その結果として綾北平野に異様なほどに巨石墳が集中することになった。大野原古墳群に象徴される讃岐西部から伊予東部地域の動向に対抗するものであったかもしれない。あるいは外部からの働きかけも考慮してみなければいけないだろう。いずれにせよ具体的な契機の解明はこれからの課題であるが、この時期に綾北平野を舞台に讃岐地域有数の、いわば豪族連合的な「結集」が生じたこ

は周辺地域の動向だ。興味深いことに綾北平野の隣接地域では逆の展開が読み取れそうだ。綾川を遡った位置の羽床盆地では古墳時代中期から後期の初めまで津頭東古墳、津頭西古墳、般若ヶ丘古墳などの有力墳が連続して築かれるが、後期半ば以降それらが姿を消し大形の横穴式石室墳が築かれることがなかった。詳細は不明だが、額坂峠を越えた城山西南麓一帯には中期末から後期後半までの間に位置づけられる国持古墳、久保王塚古墳など有力墳の存在が知られるが、新宮古墳以降の大型石室墳は見られない。国分寺盆地でも南部にやや大形の横穴式石室を有する石ヶ鼻古墳があるが、石室形態から新宮古墳に先行する。以後の時期に位置付け得る同等かそれ以上の横穴式石室墳は知られていない。

とと、次代に城山城の造営や国府の設置といった統治拠点化が進むことと無縁ではないだろう。このように考えれば綾北平野に群集する巨石墳の問題は、城山城や国府の前史としてそれらと一体的に研究を深めるべきものであり、それによってこの地域の古代史をいっそう奥行きのあるものとして描くことができるだろう。(2016年3月3日稿)

*図1、2、4、5、7 大久保作成

*図3、6 カシミール3D (<http://www.kashmir3d.com/>)

「スーパー地形データ」を使用して大久保作成